

「美術を学ぶ」から「美術で学ぶ」へ

北海道札幌英藍高等学校 教諭

八重樫 善 照

「先生」と呼ばれる仕事に就いて、早30年になろうとしています。思えば「平成」とともにスタートした教員生活でしたが、この間、多くの生徒の皆さんと接する中で、私自身、多くのことを学ばせてもらいました。彼らをはじめとして、様々な場面でご理解、ご協力を頂いた保護者の皆様、さらには、これまでご指導頂いた多くの先生方に対しまして、まずは感謝の言葉を申し上げます。

さて、現場の業務と併行して、道内の高校美術、工芸の教育課程改善の仕事に携わることになって、今年で9年目を迎えます。この中で仕事の一つに、文部科学省の教科調査官から直接、学習指導要領や授業改善に係わる説明を聞き、それらを受けて、今度は道内の先生方へ研修会等の場で伝達、説明を行うということがあります。非常に責任の重い仕事ではあるのですが、それまでそれ程、深く意識しないまま日々の授業を行っていた私にとって、調査官の発する言葉一つ一つを理解することは大変な苦勞を伴いました。それでも少しずつ自分なりの理解が進むうち、それまで見えなかった自分の授業の問題点が露わになります。今にして思えば、非常に恥ずかしい話ですが、作品制作を優先する余り「学び」としての視点が抜け落ちていました。それまでの自分の授業を受けた生徒の皆さんには平謝りするしかないのですが、この仕事を通じて気付かされることが多々ありました。

現行の学習指導要領では、高等学校芸術科「美術」の各科目において（「工芸」も同様となりますが）、「A表現」と「B鑑賞」の二つの活動を行うとされており、いずれも教材ごとに目標を設定した上で、両者を関連付けながら授業を展開していく必要があります。しかしながら、様々な事情から「表現」のみの偏ったものとなっていたり、「作品」は完成しているけれども、果たして「ねらい（目標）」は達成されたのか疑問が残るというケースが見られなくもありません。例えば「自画像」を描く授業があるとすれば、「自画像の描き方」のみを学ばせればいいのかという決してそうではありません。

「どんな自分を描くのか」から始まって、自己と向き合い、客観的な視点も持ちながら構想を練り、構図や画材、技法など様々な検討、選択、決定を重ねていく中で間違いなく生徒自身の成長が見られる筈なのです。

私が年度当初によく生徒に話すことに、『美術』が他の教科と比較して大きく異なる点の一つに『答えのない教科（科目）』である』というものがあります。そして、「答えは自分自身の中にある」とも話します（大概の生徒は「キョトン」としてはいますが）。実は「答えのない」ものの方が、この世の中には溢れているのです。そんな場面に出会った時、「自分なりの答え」を見出す力を、生徒の皆さんに身に付けて欲しいと願っています。

